

柳土ほんのろ

第9号



弁天橋のほとり。
瀬音に耳を傾けながら、十六童子を従え、ひっそりと坐す弁財天。
歳月が容捨なくその美しいお顔を持ち去っていったけれど、
女人の篤い信仰を今に伝えている。
弁財天：(上右竹下分)

特集・3

南高麗地区

南高麗あれこれ

内野博司



南高麗は、飯能市の中では、話題の少ない地域である。その理由の一つは、南高麗は成木川流域のつく一部の高麗のためである。飯能市には、高麗川、名栗川、成木川、小群川が流れているが、南高麗は、入間川支流の成木川と、そのまた支流の直竹川の流域にある。

しかし、成木川の流域地区の多くは、青梅市の成木地区、小曾木地区であり、南高麗の占める範囲はごく一部である。歴史的にみても、南高麗と隣接する成木、小曾木地区との関係は深い。また、現在でも、南高麗と青梅市の人びとの交流は多い。

本稿で、南高麗について、思いつくままに書いてみよう。

縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は多く、おおよそ一キロメートル以上ある。その多くは、日当りのよいなだらかな尾

根上にあるので、少し慣れると地形を見ただけで遺跡の存在が想像できる。かつて、それらの場所の多くは、開墾され、畑となり、石器や、土器の破片が表面採取できた。現在は再び山林化し、遺物を見つけるのはむずかしい、詳しく調べれば、さらに多くの遺跡の存在が認められるものと思っている。

当時、尾根上に人が住んでいたところは、現在の人家からは高い場所位置する。生活に必要な「水」の確保という点では、やや不便である。これは、猪や鹿などの狩猟に便利のためと説明されている。

縄文時代の遺跡からは、石鏡（矢じり）などの黒曜石でつくられた石器が発見される。その多くは、長野県のと田峠の原産とされているが、その間には急峻な山々がある。三千年から一万年も前に一体どのようにし

て、そして、どこを通過して黒曜石が運ばれて来たのか、遺跡を通じて、何かが解明できることを期待している。

縄文時代以後の遺跡

弥生時代にも人間は住んでいたと想像されるが、その遺跡は少ない。しかし、数百年も続いた時代であり、農耕文明の開始期の山間地の生活は、どのようなものだったのだろうか。

古墳時代の遺物としては、土畑から発見されたほぼ完型の土器が中央公民館に展示されている。耕地の少ない土地とはいえず、多少の畑があったと考えられ、まだ発見されると考えている。

長光寺

長光寺は、貞治五年（一三六六年）に開部小右衛門忠正によって開基されたという。

以前、ある先生と訪問したことがあるが、先生は「この寺は筋路に建てられたものだね。中

世には、そういう例が多いよ。」と言われた。今まで指摘されたことがなかったので直感を確めたいと思った。

境内の西のほうには開部一族の墓石がある。他に、以前本堂前の石垣の工事で出てきたという宝篋印塔や五輪塔の一部が庭園の一角に置かれている。形からして、江戸初期よりは前のものであろうが、一体だれのものであるのか、開部氏に關係あるのか、興味のあるところである。

国指定の重要文化財として雲板がある。雲板は、時をつげた

り、食事のときに打ちならすものである。市内には今のところ長光寺だけにある。

おもしいことに、中央の陰刻は、鳳林山長光寺権寺正和二年壬丑二月吉日」となっているが、長光寺の創建よりも五十三年前古く、当時すでに寺があったものであろう。さらに、雲板には、すりつぶしの銘があり、「正和二年癸丑十二月二十一日大工寛妙」と判読され、これが元所有者の原文であると思われる。

他に県指定の文化財としては惣門があり、壺町から、桃山時代の様式をうかがえる。





●八王子千人心

徳川氏が関東に入国したのは天正一八年（一五九〇年）である。その時に、甲州方面の警備のために組織されたのが八王子千人同心である。構成員は、武田氏旧臣を主に、在郷の有力者率人などで、最初は、八王子中心に二五〇人、さらに、五百人、千人と増加された。しかし、江戸時代に入り、世の中が平和になると、甲州方面の警備の必要性も少なくなり、日光の火災の警備に変わっていった。

千人同心は、埼玉県にも分布している。現在の市では、入間市が最も多く、他に、所沢市、そして、飯能市である。喜木年間、「千人同心姓名所圖表」によると、飯能市では、黒葉村（現在上直竹下分黒指）の市川謙十郎及び市川宗三郎となっている。両人とも現在の市川宗貞市長の先祖とのことである。市長

さんの話によると、ごく最近まで、八王子方面との交流は、かなりあったとの話であった。前記の二名は、名籍の最後へ行っているが、地理的にも千人同心の最も北に位置している。このことから、この地域の多摩方面との関係が想像できる。

●富士浅間神社のタブノキと

その周辺

上直竹下分間野の富士浅間神社の裏山に、県指定天然記念物のタブノキがある。神秘的な感じのする巨木で、目通りの周囲は五・五メートルあり、推定樹令は七〇〇年である。タブノキの分布としては、北限となっている。

ところで、神社の裏山には、タブノキの他に、常緑のカシ類、ヤブツバキ、ヒサカキなどが、広く見られる。これらの常緑広葉樹は、近年「照葉樹」と名づけられた。照葉樹林は、世界的

に見ると、ヒマラヤ山脈の東側から始まり東南アジア北部・中国の雲南、そして、陽子江付近を経て日本に至っている。そして、照葉樹林地帯に古くから発達した文化は「照葉樹文化」とよばれた。ところで、日本においては種作が本格的に始められたのは弥生時代のことであったが、それより古い縄文時代ですでに、農耕が行なわれていたと言われている。照葉樹文化の代表的な作物としては、サトイモやヤマイモなどのイモ類の文化の特徴で、いくつかの縄文時代の遺跡からは、漆塗の櫛や弓・容器などが見つかった。それらの遺跡の多くは、湿地地であるので、木製品の保存が良好であったのであるが、飯能では、縄文時代の遺跡分布は高台が多く、それらは、発見されにくいだろう。しかし、小湧水の付近などでは、漆器発見の可能性がないわけではないと思っ

ている。

ところで、平地や、丘陵地の森林の多くは、植林されたものを除くと冬には落葉広葉樹やアカマツがほとんどである。これらの林は、薪炭などの燃料への利用・下草・落葉の農耕への利用のための人力によって管理さ

れ成立していると考えられている。京都などの有名な観光地で、アカマツ林を保護しようとして、手を人はずずに放置したところ、やがて、結果的には照葉樹林になってしまった例は多い。飯能周辺でも、雑木林に手が入らないうちに、照葉樹が自立的で数十年前後は、照葉樹が目立ってくるのと思われ、日本の原始文化の源」と思っ

●峠

南と北が低山ではさまれた南高麗にはいくつかの峠がある。最もなじみがあるのが赤根峠である。かつて峠の周辺には、粘土が掘られ、飯能焼がつくられた。現在でも、よく注意してみると、粘土を採取したと考えられる場所が何カ所か認められる。

赤根峠には、何本もの道が集まっています。かつて南高麗から、飯能等への重要な道であったことがうかがえる。この付近は、日露戦争当時に、地形が二三百高地に似ていることから、軍隊の演習に使用され、道も整備されたとのことである。

岩瀬から青梅市今井方面には三国峠がある。かつては、小田原老条氏が使用した重要な道であったらしい。岩瀬には、青梅や川越方面を示す道標が残っている。

原市場方面と、下直竹下分との間には山王峠がある。この峠も、中世には、秩父と鎌倉との往來に使用されたようである。青梅市作成の地図では、鎌倉街道としている。

青梅市の安楽寺の西側と下直竹を結ぶ峠は、合戦坂と呼ばれているが、その由来ははっきりしないが、文字どおり、かつて合戦が行なわれたものと想像される。



田安箱百姓一揆

岩淵に犠牲者の墓も

吉田 靖

江戸末期の慶応二年（一八六六）、飯能近辺を舞台に発生した武州一揆（いっき）は僅か百二十年前の出来事であり、打ち壊しに会った家が現存していることもあって、一般にもよく知られている。ところが、武州田安箱訴事件」となると、ほとんど知られていない。飯能や青木の百姓たちが、命がかけて生存権を守るためにたたかっていたこの事件、歴史のページに止めておかなければなるまい。

◆目安箱利用の合法運動も……事件は江戸中期の宝暦十一年（一七六一）に発生した。

その年の四月、田畑の意欲を挫いた田安飯能の代官、竹内勘左門は青梅や飯能近辺の総代名主を始め名主、組頭を一堂に集めて年貢・税の増額を申し立てたのである。郡奉行の遣しは殿様の連しと心得よとされていた時代だから、総代名主は「二も三もなく快諾、百姓たちは一も二もなくお達しがあったので、ありがたうお受けするよう」と指示した。

「なにになに、また年貢を増やせって？ とんでもねえ。これ以上増税されては、百姓は生き

ちやアいけねえ」

普段は従順な百姓たちだが、もう黙ってはいられないと立ち上がったのである。そして、村ごとに每晚相談を続けた結果、將軍家が庶民の声を聞くとして実施している「目安箱」制度を利用して、税金の減免措置を願い出ようということになった。毎日一日に実施している目安箱制度を利用するのが、目的完遂には最も早道で、犠牲者を出さずやつむと考えたわけ。が、いざやってみると、そこには大強圧が待っていたのである。

ここで話を前に戻そう。

◆徳川御三卿の誕生と藩領

「田安家」というのは、徳川御三卿（二つ橋、清水、田安）の一つ、いわゆる將軍家直々のお城を持たぬ藩領である。江戸幕府が成立したから百十餘年、徳川幕府にもあちこちにひずみが出ていた。特に徳川御三家の尾張、紀伊、水戸がどうも將軍家から離れ、頼りがいがなくなりつつあった。そんなとき八代將軍の座に打ち出した吉宗が幕府強化策として打ち出したのが享保の改革と「御三卿」の設置だったのである。



貞七から十代目小見山貞七さん(故)の夫人ますさんと当時の古文書

吉宗の長男が病身だったことから、二男、四男と九代家重の子の三人に一家を持たせ、將軍家に跡継ぎがないなど、いざというときに紀伊など御三家に頼らず守ろうというわけで、江戸城内に住ませ、それぞれ十萬石程度を与えた。

田安家の領地は岩淵、笠懸、中藤、赤江（以上四ヶ村は現飯能市）日陰和田、畑中（現青梅市）など、高麗郡、多摩郡付近の五十一ヶ村であったが、箱訴事件が発生したのはこのうちの岩淵、日陰和田、畑中など十九ヶ村だった。

◆村人一丸で箱訴運動

百姓のなみなみならぬ決心のほどは彼らの「連判状」(青梅市の関係者宅に現存)によってよく知ることができ、

「御訴状、相済ます内は何年かかり候ども、村内仲良し、

喧嘩口論など不埒これをなすやう。火の用心を固くまもり、訴訟のたれ江戸へ出て候者の留守宅は五人組などにより家族同様に世話すべきこと。」

何年かろうが、生活を守るため、目的完遂までみんなで助けあつてがんばろうというのである。

その時だれかが言った。「箱訴は合法的手段で、一揆とは違ふが、だからといって幕府がすんなり訴状を受け取るはずはない。かたりの危険も覚悟せねばなるまい」というのである。いざという時のため、各村ごとに抽選で訴訟人を決めることになった。したがってこの運動には特定の義民や英雄など中心人物は浮上してこないのだ、よくよく考えた作戦だったにちがいない。

◆江戸から傳らぬ訴人たち……先発に決まったのは日陰和田村の清兵衛と同伊衛門の二人。それから何回か訴状を提出したが、それのおとさもない。そこで作戦をもう一歩進め、田安家老への提訴も併せて実施したところから、行った者が帰つてこなくなりました。クジに当たった岩淵村の貞七と六右衛門、それに藤原の三人も出掛け

たが、捕まってしまう、貞七と六右衛門は拷問に会い牢死、藤原はそのまま帰らず、不明のまま

ま。村人は「おそろく殺され、捨てられたのだらう」ととききやきあつていったという。このままでは犠牲者が出るばかりで、要求も入れてはもらえないというので、こんどは各村民総出で江戸へ押し掛けることを決めた。器物こそ持たぬものの、これはまさに一揆。当時としては驚くべき一大モストレーションだったのである。そのときの幕府の驚き、あわてようは大変なものだったらしい。「徳川実記」にも「百姓ども大挙押し掛けたり云々」とある。

だが押し掛けていった者のほとんどが捕まり、裁判にかけられてしまう。捕まえてはみたものの、数が数だけに幕府としても皆殺しにもできず、▽所払い(居住地からの追放)八名(うち六名牢死)▽田畑没収一名(の



岩淵の義民・貞七と六右衛門 二人の墓(左側)

●信仰の旅

一八王子石灰焼の創始者と歴史―

師岡貞雄

ち牢死、▽後取り上げ、手鎖五十日、四名▽お此り、十一名などの判決を下したのである。

一方、田安家は、判決とは別に、年貢税の大幅減免を村人に通告せざるをえなくなった。村人はたまたかの甲斐があつたと

よるこぶが、しかし、そのため死者十二名をはじめ、田畑の没収、追放など決して少なくなつたのである。たゞ、残された村人たちが連判刑の過目を生かして、犠牲となった家族をそつと

たえてゐる」とある。

(この佐藤塚は南高麗地区の歴史と古道散歩立寄りの所)

石灰焼の歴史については埼玉県史、青梅市史、飯能市史、などに記述され文献として残っているが、果指定文化財の上直竹の旧御国家敷地に位置する、石灰焼窯跡(本山)の研究は、故加藤一氏によつて発表されて

新編武蔵風土記稿・高麗郡上直竹村の条に「石灰・里正伴次郎・村民庄次郎二人の者、石灰を製す。是は世に謂ゆる八王子石灰の根元なり、相傳ふ二人の先祖某天正年中、八王子城主北条氏の家臣たりしが、彼城没落の後当村に引継ぎ、始めて石灰を製せし。慶長年中江戸御城御造營の時、石灰御用を務めしよりこのかた今も替らず、此石灰を製するもの十二人の株となりて、其七人は多磨郡成木村にあり、三人は同郡小曾木村にあり、二人は即ちこの村にあり」とある。

風土記稿の「佐藤家の項に、松本峠の麓に住道傍の傍にあり、天正年中北条氏照が家臣佐藤助十郎と云ふの此地に來り住し、上成木村に住める木崎某、川口某等三人とはかりて、始めて石灰を製せしよし、この家も今は

石灰焼の根元は、北条家の家臣といふべく、その実名に於いて記述はなれども、昭和四十七年御國家三百五拾年祭の折、故木崎清春、故加藤一両氏の御尽力によつて、古文書、古位牌、古過去帳が発見され、石灰焼創始者の実名が確認されたのである。(昭和四十七年・飯能市文化財時報参照)

清戸三番衆の武士たち

この「清戸三番衆状」は、永禄七年(一五六四年)北条氏照から青梅、飯能地方に住する武士団に発せられた軍勢結束命令書である。三田綱秀(青梅市二俣尾幸垣城主)、永禄六年三月、北条氏照の攻撃を受けて没落後、その武士団の形勢を知る唯一の史料として青梅市重宝の指定をうけ、近郷の市町史に取り掲げられてゐる。

解説・すなわち連名四十一人の者に通知するように三田・師岡両人の者に継進したもので、清戸三番衆は五月十九日に在所

助けつづけて暮らしたとの話が伝わっている点が救われる。

●二人の義民の墓に

いまも鎌倉が

この一俣、飯能でも岩淵の貞七、六右衛門、篠藤をはじめ、岩淵村の名主・佐原次の行方も

北条氏照の家臣団の在住の地でもあつた。

石灰焼の根元は、北条家の家臣といふべく、その実名に於いて記述はなれども、昭和四十七年御國家三百五拾年祭の折、故木崎清春、故加藤一両氏の御尽力によつて、古文書、古位牌、古過去帳が発見され、石灰焼創始者の実名が確認されたのである。(昭和四十七年・飯能市文化財時報参照)

清戸三番衆の武士たち

この「清戸三番衆状」は、永禄七年(一五六四年)北条氏照から青梅、飯能地方に住する武士団に発せられた軍勢結束命令書である。三田綱秀(青梅市二俣尾幸垣城主)、永禄六年三月、北条氏照の攻撃を受けて没落後、その武士団の形勢を知る唯一の史料として青梅市重宝の指定をうけ、近郷の市町史に取り掲げられてゐる。

解説・すなわち連名四十一人の者に通知するように三田・師岡両人の者に継進したもので、清戸三番衆は五月十九日に在所

わからぬままだが、牢死がはつきりしている貞七と六右衛門については当時の村民代表とみられる友助、太良右衛門、五良左衛門の三名により、村内・杉戸寺入り口に墓石が建立された。その墓石には今日でも墓まいりを立、二番衆と交替させた。この二番衆は五月二十日より六月初四日までの十五日の当番である。三田谷は清戸に近いので三番衆は五日の早朝に各々の住居を出発し、五ヶ刻、即ち午前八時までに箱根ヶ崎(瑞穂町町)に集合。この書立と引き合わせて、一人の不足、又、遅刻もないよう同一打揃つて、箱根ヶ崎を立つよう、清戸に到着したならば二番衆の引率者布施(布施正左衛門、同業者作、毛呂付近に領地を有した人)と相談し、当番を引継ぐべし、境目大切な番所であるから、たとえ寸時でも番所が留守になつた、などということが氏照の耳に聴えたら、切腹にものである。このことをよく一回にも通知し全員揃つて定期に箱根ヶ崎を立つよにせよ、万一通知が届かなかつたため不参の者があつた場合は、後日調査の上、三田・師岡両名の責任を問うであらう。(青梅市和田信之氏所蔵文書より)

三田谷在住の武士の研究については郷土史研究者である青梅



北条氏照印判状

の人びとの緋や花がたむけられてゐる。

(この稿、元青梅市立郷土博物館係長・瀧沢博氏著「田安家箱訴事件」および貞七の子孫である飯能市岩淵の小見山さん宅保存資料より)

市成木に在住の野島厚之氏によつて調査発表されてゐる。

この古文書記載の連名中にある、師岡新右衛門、木崎又兵衛が石灰焼創始者であり、子孫代々家元として、これを引継いだ。佐藤助十郎、川口某の名は清戸三番衆に見当たらず、師岡、宮寺、藤橋、久下等は家臣を五騎から二騎もち、また、連名の武士はいずれも騎馬武者であるから名のある家臣数名を従えていたであらう。この武士団の中に、佐藤・川口某が任えていたのではなからうか。

子の権現と竹寺へ

木村善三郎

十二月三日は初冬の暖かい一日であった。私は「山岳信仰を訪ねて、子の権現と竹寺へ」の研習会に参加させてもらった。車中では、本日の講師、大野さん・丸山さんから、子の山への代表的な登山口について、その具体的な姿を分かりやすく教えてもらった。

例えば、子の聖人が開山の時に使われた道といわれるのが、寄居・越生・三社方面からの道である小床口であることも学べた。車は曲がりくねった山道に入って、やがて子の権現に着いた。子の権現のご住職や古田茂先生のお話から、平安時代に折願寺であったこと、開山聖上人が子の聖人を大権現と崇められて宝殿を創建されたこと、子の聖人は高野山に近い紀伊国天野郷でお生まれになったこと、生まれた時が子年子月子日子刻であったため月に子の聖と呼ばれたこと、月山の峰から、所願の般若経を虚空に投げられたところ、この武蔵野国秩父郡我野峰に止って光明が虚空を照

らしたところ、江戸時代には羽田三山の影響を受け、天台宗東叡山の寛永寺との関係が深いことなど、いろいろ詳しく知ることができた。

心地よい陽ざしを背に、私たちは子の権現天龍寺を後にして、尾根伝いに豆口峠を越えて竹寺に向かった。一汗かき始めた頃に、「神送りの場」という標識の立つた所に出た。その標識には、「峠は隣りの村との連絡所であると共に、そこはふつう村境であることが多い。峠の近くには神送り場というところがあった。昔、悪い流行病などがはやると、村人たちは、夜中に大勢で鐘や太鼓をたたいてここに駆け登り、頂上で厄病神を追い払うという習わしがあった」と話されていた。

美しい奥武蔵の山並みから目を放すと、厄病神を追い払うために駆け登ったであろう村人の姿が浮かんでくるようであった。それにしても、追い払われた厄病神の逃げ場となった隣村の人びとはどうしたのだろうかと考え

ると、面白くもあつた。やがて、まゆみが美しくまついた竹寺（天王山八王寺）に着いた。ここで有名な竹づくしの昼食をいただいた。大野副住職さんと浅見さんのお話を聴いた。役の小角（三四七〇一以後）と修験道について、改めて郷土飯能とのかわりを知ることができた。

「三十二歳で葛城山に登り、三十年間穴居して山を出ず、常に木食して孔雀明王の神咒を唱え奇異の術を得た」とされる小角は謎の多い人物らしいこと、また、修験道は室町時代に入った。増養、増養の流れを汲む本山派は聖護院を本所として熊野三山の修行をし、聖宝の流れは当山派といわれ、大修行を行ないう。醒醐寺を本寺としているということ。本県では慈光寺の

かわりや、笹井の観音堂や越生の山本郷などは、京都から布令を取り次ぐ役割を果たしており、里修験の中心でもあったこと。明治五年の神仏分離によって修験宗は廃止され、飯能の里修験の多くは通俗したらしいと

いうことなど、いろいろと勉強させていただいた。

また、この天王山八王寺（竹寺）は神仏分離以前の姿をそのまま伝えているものとして貴重である。「字界余演（昭和十五年・朝日）」には、「寺でありながら参道には鳥居が建っている。主要建物は神社建築であるが、牛頭天王と呼んでいる本坊も内陣は純然たる神前御殿が設けられる、その前には護摩壇が設けられ仏像もつて奉祀されている。」などと記されている。

ところで、私は牛頭天王とゆかりの深い「蘇民将来」―柳樹によつて作られ、朱と墨とをもつて彩色された六角の塔形―について関心をもち、その由来が「備後風土記逸文」に詳しくある。その中で語られている兄蘇民と弟将来の像は、兄の蘇民は貧しく弟は富穡であること。蘇民は心暖かく、武塔神をもてなしたのに対して、弟はこれを拒絶したところである。疫病がこれを

つた時に、兄蘇民一家は茅の輪を帯びて助かるが、他は悉く亡び尽くされる。武塔神を素盞鳴尊とすること是非はともかく、武塔神を牛頭天王とする。《「公事根源」の祇園御室会の説》とことから、この天王山八王寺にも、「蘇民将来」の六角

塔が建てられているのであろう。いずれにしても、私には、兄の蘇民が貧しいのに心暖かく、弟の将来が豊かであるのに心貧しいということが気になったのである。「古事記」の海幸彦、山幸彦兄弟に思いが及んだ、大照命（海幸彦）は兄であり、火速理命（山幸彦）は弟である。日本の古代社会では末子相続であり、弟が賢く心やさしく、兄が依怙地で悪玉に仕立てられる例は多い。あれこれと思ひ合わせていると、異質の文化の伝承が偲ばれて面白い。

閑話休題。思わぬ横道へ、あてもなく迷い込んでしまったが、お蔭様で実り豊かな研習会に参加させていただけたことを感謝している。



随筆

竹におもよう

大野邦弘

五月の新緑は日に鮮かに映り、心に安らぎを与える。この頃、箭はグン／＼と背を伸ばし天を突き上げ、親竹は葉を舞い散らして風に乗るサラ／＼と黄色い散りている。まさに、「竹の秋」の季節である。

竹は東洋的な魅力を持っており、古代より親しみをもちて文学等に表われている。

竹の語源は、万葉集抄に「タ」とは高き義なりと、またタとは古語に木をケと呼び、タケとは高き木の意なり」と見え、室井緯氏は「たけし、たかし、たくの味」と言う語幹をもとにして、タケの語源は「箭の生長の早いこと」が名のおこりになったものと思われる」と述べている。二〜三ヶ月で生長し成竹となる。これは他にはない伸び方で目を見張るものである。中国が古代の文獻「竹書」に「剛ならず、柔ならず」草にあらす、木にあらす」と述べられているように既成

の範疇におさまらないところが竹の特徴であり、人間の生活のすぐそばに存在しており、近くにいる人間の心の深い所までしみ込み、俗気を抜き去ると考えられ、特に文人面にも竹の絵が多く描かれている。

宋の蘇東坡は「肉がなければ人は瘦せ、竹が無ければ人は俗っぽくなる。」と言ひ、中国、日本でも文人達に愛されている。

●地名の中の竹

古より愛された竹であり、地名にも見出すことが多い。市内の竹のつく地名は以外と少ない。

●唐竹（からたけ）

（原市場地区）

新編武蔵風土記稿に、

○唐竹村、土人の説に往昔この村に高麗より移したる竹あればとて、土人呼て唐竹村と云しとかや、惜むらくは今その種を失ふことを」とあり、

埼玉地名誌（重宝集一三郎著）によると、前記新記を引き、「高麗の地であるからこのような伝



説となったものであろう」としている。この地には「白髭社」があり、数年前までは社の裏に黒指定「唐竹の大榎」がドクシリと根を張っていた。千百年もの時の流れを見守っていた。

なお、「竹類語彙」によれば、「唐竹」とはハチク（淡竹）、マダケ（苦竹）、末竹のことを、

総称して唱えたものとして、この高麗文化の流れの中で、この地名が何とも言えぬ重みを感じ

る。この唐竹南の山に「四十八曲」

がある。新記に「四十八曲嶺・村の南、上直竹村にいたる一路なり、曲徑羊腸最も険隘にして四十八曲ありと云、」今でも上直竹上分、細田集落へのハイキング道として使われている。

●直竹（なおたけ）

南高麗地区

新記には「上直竹村」「下直竹村」とあり、地名の由来等の記載は見えない。

埼玉県地名誌に「直竹の名は曲竹に対する直竹であろうか」とある。現在は上直竹上分、上直竹下分、下直竹と直竹川に沿って存在する。



●曲竹（くせだけ）

原市場への入口、名栗川と中藤川にはさまれた地にある。現在は字原市場となっており小字名である。

新記には「曲竹村」とあり、地名由来は記していない。この中に「明泉寺・竹林山と号す」とあり、山号に竹林山を称するものも何とも興味をひかれる。

この地を流れる名栗川が曲がりくねって崖を削って流れ、今でも高い崖が交通路を狭めている。「曲がりくねった崖」「くせだけ」とも考えられる。崖に今も淡竹やらシノ竹を見かける。崖に生える竹は根本は曲がりくねっており、「くせだけ」はこの両方の意を含んでいるようにもみえる。県地名誌にあるように「曲竹」「直竹」何とも言えぬ対称的な地名である。

竹は生活の中に生きており、人間の文化を造り、文化の流れと共に生き続けている。そして、地名の由来もこの中で育まれた歴史であるとも言えよう。



シリーズ地場産業めぐりⅡ

飯能と木材 関根美智子

平成元年二月十八日、郷土史研究会の例会が、「地場産業めぐりパートⅡ」として、木材研究会をテーマに開催された。雨の中ではあったが、井上峰次会長は案内で参加者約二十名、木工工業団地（外材）と大河原木材構（内材）を見学、市民会館で勉強会というスケジュール、充実した一日であった。

最初の見学地は、芦荻場に約二万平方キロメートルの敷地を有するミニ木材工業団地。ここでは、都市化の進む市街地を離れ、一層の技術革新をめざす木材・建具等の企業五社が操業している。

団地は周りを畑に囲まれ広々としたふん囲気だ。私達は武居木材構の作業場を見学して頂きながら、武居社長にお話を伺った。国内での運搬費の高騰や機械が高価なため、外材の方が安く、輸入先は主に北米、ソ連とに外国で裁断され、U・S・A等と印刷された木材が用途別に整然と積み上げられている。びっちら

包装された合板材もある。木材の質は内地材と殆ど変わらず、木目や節などにこだわらなければ、湿気にも強く丈夫で安価だという。機械音の響く広い作業場に、作業する方が五、六人と少ない。コンピューターを駆使し作業は安全、迅速に行なわれる。外材は現在木材市場の七割を占めるそう。ツープバイフォー方式の

話には会員の間からため息も出る。武居さんの話は住居に対する私達の先入感を次々打ち破っていく。

広い団地内を案内して頂きながら、私達は飯能の木材産業にも国際化、技術革新の波が押し寄せているのを感じた。

二番目の見学地は、大河原にある大河原木材構。武居木材に比べるとぐっと小規模な作業場で、山から伐採された木々がゴロンと寝かされ、ゆっくりと樹皮を剥かされている。何となくホッとする光景だ。

事務所で若社長と専務さんにお話を伺った。湿気に強い木の家は日本の住宅として最適。中

でも土地の木で家を建てるのが理想、西川材は硬く、ツヤがあるのが特徴と、こもこもに内地材の良さを説明して下さい。材料は全て西川材、という事務所の落ち着いた行まいに、私達も今更ながら西川材の良さを実感。しかし、内地材は現在さまざまな問題を抱えている。

木材量の不足、原木の高騰、流通業者間の競争、運搬費、大工等手間賃の高騰等々。

地場産業の未来を憂うる会員から次々質問が出され、活発な意見交換も行なわれた。

内地材では業者間の隔差がひろがる中で、大河原木材では仕事を断わるほどの盛況だ。幼稚園に木の遊具をプレゼントするなど、内地材の宣伝にも一役かっている。消費者の本物志向に待たれたいと若社長。

少々粗けずりだが、安価な外材の家庭、暮らしていた内地材の木造住宅、暮ら消費者も、住居を選択する時代というところ。大河原木材を辞す頃には、前日からの雨も、ようやく上が

った。

市民会館で昼食のち、井上会長に飯能の森林・林業の歴史及び現状について、西村副会長に伐洗しの歴史について、それぞれ貴重なお話を伺った。後陣のさまたげエピソードや、祖父が後陣だったという會員の方

の体験談も出て大いに盛り上がった。

ここでも地場産業の現状について討論され、出席された教育委員会の森田課長に、今、建設中の郷土館には、西川材を有効に利用して頂くようお願いし、午後三時、会を終了した。

郷土館の

(歴史民俗資料館)

開館に向かって

すでに皆様方もご存知のように、飯能市では昭和六十三年度事業として、郷土館の建築工事を施工し、本年四月に完成いたしました。

もっとも、完成したいといとしても、建物工事が終了したということ、内部の展示工事は平成元年度事業として実施することになっており、教育委員会社会教育課郷土館準備が設置されて、開館に至るまでの諸準備に当たっております。

本会員の皆様にも、郷土館開設に当たってはかたがたご指導、ご協力をお願いしておりますが、来年度はじめて開館する予定ですので、一



(浅見、記)

郷土館準備係

電話 七二一四一四

63年度の 活動



二カ月に一度の例会が、いつものまにか郷土史研の姿となつてなじんでまいりました。今では葉書が届くのを楽しみにして下さる方々もおります。

出席できなかった方々に、一年間のあゆみを報告いたします。

* 四月例会

○信仰への道

講師 大野邦弘氏

○古道を旅する

講師 丸山 浩氏

今年度は、古道を歩く、というテーマのもとに、トツプを切つて、信仰への道と、飯能付近の峠道と取りあげました。五十名もの参加者を得、文化的、産業的見地から、飯能の位置づけを勉強しました。

* 五月例会

* 記念講演会

飯能地方の金属伝承と地名

講師 谷 有二氏

毎年六月に総会を行なつてお

りました。講師のご都合で五月に行ないました。

事業が拡大されていることから、年会費千五百円の値上げ案も可決され、活性化は確実に図られてきたようです。

谷有二氏は、飯能の地名を視点を要えて、金属の分野から純め、因果関係を興味深く話されました。

* 八月例会

* 南高麗、岩瀬地区めぐり

残暑の外例会も定着し、岩瀬地区めぐりは、歴史の目からこぼれてしまふような供養塔などに思いをはせました。また、吉田靖氏からは、妙円寺の供養塔など、この地区の歴史を話して頂きました。

* 十月例会

* 第四回郷土歴史散歩

— 南高麗地区めぐり —

講師 内野博司氏



山の向こうの静かな里には、旧飯能とは違った独自の文化がありました。いろいろと知るころの多い一日でした。(前述の内野、節岡氏の稿を参照)

* 文化財展

恒例の教育委員会、文化財保護審議委員による、秋の文化財展には、郷土史研も合同参加し会期中の当番なども担当しました。

* 十二月例会

* 古道を歩く、山岳信仰への道

— 子の山から竹寺へ —

講師 大野邦弘氏

今年のメイン行事の一つにふさわしく、五十名近い参加者に取り急ぎバス輸送に切り換えての対応。会員の野野伸一氏が運転を買って出して下さいました。子の権現では、住職自から説明を頂き歓迎して下さいました。その陰には、会員の吉田茂氏の



お口添えもあり、また、竹寺では、やはり会員でもある副住職の大野邦弘氏のご厚意で、あの「竹寺」の昼食を戴き、参加者は感激の初冬の日を過ごしました。

飯能郷土史研究会の層の厚さと会員意識の深さに、改めて感動した一日でもありました。

* 二月例会

* 地場産業見学会……西川材

と外材

地場産業を知ろう……というシリーズも、二月例会として定着し、今回は内地材と外材を比較しながら、日本の木材産業の構造を勉強しました。

また、昼食後(市民会館)の勉強会では、井上会長から、西川材の歴史を、副会長の西村氏

から飯能のいかにについて、それぞれ意見発表がありました。(前述の関根氏の稿を参照)



以上、企画通りの事業が行なわれましたが、それぞれに特色があり、改めて飯能の歴史の深さに触れたいです。

会員数も百五〇名と年々増えて、多方面の方々参加がこれからの郷土史研の発展につながると思えます。

会員の皆様から、こんな企画を、と事務局にお寄せ頂いたらまたまた多くのお出合いが待っているのではないかと存じます。



平成元年度

行事予定

●四月 例会(おしろう)

●六月 総会、並びに記念講演
会。講師 千嶋 寿氏●八月 例会(考古、飯能の出
土品)●十月 歴史散歩
(旧飯能地区)●十二月 例会
(歴史散歩の事後学習
会)●二月 例会
(地場産業見学会)●本年度は郷土館オープンに先
きかけて、考古学の分野を取り
入れてみました。また、歴史散歩は、足で歩き
ながら、市内の文化財に目を向
けようと思っっています。ご意見
ご要望などありましたら、担当
理事、岡野・野口・桑山までご
連絡下さい。また、地場産業見学会は、酒
蔵とやきものを予定しています
ので、多数のご参加をお待ちし
ております。

新入会員

(敬務略)

落合すみ(虎秀四〇五)

浅見昌一郎(川寺七七)

内藤可代子(双柳四五四一四)

小山敏子(南野二一五)

馬場さと子(川寺七一五)

西久保敏二(野田一四八)

天野製絵(前ヶ貫二六六三七)

緑川栄枝(中山三三六九一六)

城田富子(川寺二九四一)

杉山えい(井上一〇七)

藤村美代(稲荷町四一八)

大山喜一(川寺一六七一一八)

島崎たか子(笠越二〇二)

内野喜作(川寺三九六一七)

成澤由起子(上名栗二九一七)

笠原己三男(下赤工五五四)

佐野弘子(赤沢三三)

豊泉治夫(所沢市七ヶ島
五一八一—一九一五)

●ご入会の手続きは

本会では、平成元年度の会員
を募集しております。会員には、定例会の案内、機
関紙「郷土はんのう」の配布な
ど、その他、郷土史研究に関わる情
報提供などを行なっております。
また、親睦会などを通して、

会員相互の交流も図れます。

お問い合わせ、お申し込みは
事務局、または、お知り合いの
会員までご連絡下さい。

事務局

飯能市双柳一―

市役所教育委員会
社会教育課(仲島)

電話(七三)二二一―

年会費は郵便局で
振り込めます。本会の会費は郵便局の振り込
み口座でも納入出来ます。是非
ご利用下さい。

口座番号

東京 7168135

加入者名
飯能郷土史研究会

飯能市史文化財資料より

会員
コメント●小山誠三氏が、七月の市長選
に立候補しました。●丸山清氏が、入院されました
が、元気にカムバック。よかつ
たですね。●唐竹の本橋幹治氏が、ご高齡
を理由に退会されました。こ
れからもよろしく。●大野邦弘氏、竹二人展、双木
利夫氏、「まぼろしの飯能橋」出
版など、皆さんがんばっていま
す。●郷土館が完成し、浅見徳男氏
と柳信吾氏が郷土館勤務とな
りました。(前述)●新井前会長が、秩父因民党と
飯能について、まとめて下さい
ました。ご希望の方は事務局ま
でお申し出下さい。●昨年の冬至の日には、木の香
も新しい諏訪八幡神社の社務所
で、冬至について語り合いまし
た。野口正元氏の手品もよかつ
たです。

編集後記

二カ月に一度の便りは、皆様
方の胸の中に、しっかりと刻み
こまれました。「便りが遅れると、どうしたの
？」と聞かれてくれます。そ
んな仲間たちに勇気づけられて
一年間歩んでまいりました。企
面が片寄らないように、そして
新しい発見につながるように、
と思っっていますが、いかがでし
ようか。ご意見をお寄せ頂けた
ら幸いです。今、飯能が大きく変わろうと
しています。新しい文化の夜明
けが見えてきました……。

(桑山、記)

題 字 小谷野 寛 一
表紙写真 坂 口 和 子郷土はんのう 第九号
発行日 平成元年6月3日
発行所 飯能郷土史研究会
飯能市双柳一―
教育委員会社会教育課内
印刷所 コバヤシ印刷